

風のように

甘木教会

主任牧師：白川道生

教会委嘱牧師：竹田孝一



彼らを牧する牧者をわたしは立てる。群れはもはや恐れることも、おびえることもなく、また迷い出ることもない」と主は言われる。見よ、このような日が来る、と主は言われる。

エレミヤ書23：4，5

御父は、わたしたちを闇の力から救い出して、その愛する御子の支配下に移してくださいました。

コロサイの信徒への手紙1:13

するとイエスは、「はっきり言っておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」と言われた。ルカによる福音書23:43

【説教要旨】

ルカによる福音書を中心とし歩んで来た教会暦を閉じます。

聖書日課には、イエスさまの十字架の出来事です。十字架の出来事の記事は、マルコ福音書を土台として、マタイ、ルカがそれぞれの自分がもっている資料を使ってそれぞれが独自の十字架の記事を書いています。

ルカによる福音書が伝えたイエスさまの私たちへのメッセージは、失われた者を取り戻す。神から離れた罪人を取もどすという事です。今、松崎保育園は、取税人ザアカイの讃美歌を子どもたちは歌っています。

1. 「ザアカイ、ザアカイ、おりなさい あなたの おうちにとまります」 思いもかけない おことばに 木からいそいで おりました

2. 「ザアカイ ザアカイ きょうからは あなたは わたしのおともだち」 思いもかけない おことばに イエスの おそばに はしりよる

罪人としてしか生きられない取税人ザアカイをイエスさまは

多くの人の中から目を留められます。

「イエスは言われた。『今日、救いがこの家を訪れた。この人もアブラハムの子なのだから。人の子は失われたものを捜して救うために来たのである。』ルカによる福音書19:9—10」とザアカイの物語をイエスさまは結びます。

イエスさまのこの世における最後の十字架の出来事にも、イエスさまの両端には、迷い出て、犯罪を犯した罪人がいました。二人の犯罪人が、イエスと一緒に死刑にされるために、引かれて行った。彼らは迷い出て、犯罪を犯し、十字架という闇のうちでもがいています。このもがいている犯罪人をイエスさまは、裁くのではなく、私たちにとって、驚くべきことをこの一人に宣言されるのです。

するとイエスは、「はっきり言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」と言われた。ルカによる福音書23:43

彼ら犯罪人は楽園、天国にはいるというのです。迷い出ていた犯罪人を失われた二人を取り戻し、天国にイエスさまはつれていくというのです。神の愛は、罪人に近づいてきてくださいます。最後までイエスさまは罪人を連れ戻し、愛を与えてくださるのです。

彼らを牧する牧者をわたしは立てる。群れはもはや恐れることも、おびえることもなく、また迷い出ることもない」と主は言われる。見よ、このような日が来る、と主は言われる。

エレミヤ書23:4, 5

御父は、わたしたちを闇の力から救い出して、その愛する御子の支配下に移してくださいました。

コロサイの信徒への手紙1:13

み言葉の通りに神は十字架、闇の極み、滅びの死の中で苦しむ者をもはや恐れることも、おびえることもなく、また迷い出ることもない者と神はしてくださり、御父は、わたしたちを闇の力から救い出して、その愛する御子の支配下に移してくださいます。私たちは、この一人のようにされたいものです。神の愛に触れて、イエスと共にパラダイスに入り、この世に属さな

いものとなりたいのです。

一方、イエスさまの愛に、神の愛に触れたのにもかかわらずもう一人は、「十字架にかけられていた犯罪人の一人が、イエスをののしった。『お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ。』23:39」とイエスを、神の愛をののしるのです。ルカが伝えたことは、悔い改めです。イエスさまの元に帰ることです。

3. 「イエスさま、イエスさま、きょうから わたしは あなたに つかえます」心のかわったザアカイはイエスさまのお弟子になりました。それは、「はっきり言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」という一緒にはいるということです。これが悔い改めです。

世界では、パレスチナでの民族間の争い、歴史観の対立によりロシア大国の侵略目標にウクライナはされ続けています。それに油を注ぐようにアメリ大統領トランプ氏は、それぞれの暮らし方、生き方、考え方の違いを認めず、利益もからみ対立が助長しています。対立はいやがうえにも高まり、その緊張も高まって、爆発し、一挙に力ですべてを解決しようとする方向に、ことが運んでしまいました。迫害、虐殺は、当然のなりゆきになりました。たとえひとときの平和と繁栄が許されたとしても、それは束の間ことであり、破壊されていく危機と紙一重の状況にあったことを知らされました。それは、私たちの罪の結果です。不安で、先が見えない日々を生きていても、ここに十字架に架かられたイエス・キリストが横に立って、私たちの苦しみ、闇をいっしょに背負い、「はっきり言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」と告げてくださっています。

彼らを牧する牧者をわたしは立てる。群れはもはや恐れることも、おびえることもなく、また迷い出ることもない」と主は言われる。見よ、このような日が来る、と主は言われる。

御父は、わたしたちを闇の力から救い出して、その愛する御子の支配下に移してくださいました。

牧師室の小窓からのぞいてみると



アフガニスタンで人道支援をしていた中村哲さんが武装集団に襲われ亡くなられ、6年目になる時の11月に支援団体ペシャワール会の活動報告の会に400人も集まり、活動をこれからも継続していくというニュースがあった。この自己中心の世界にあって、自分、民族、国家を超えてこのような支援を続けることは希望が湧く。

私たちの教会も「共に生きるーバングラディシュ支援」、ルーテル社団を通して多岐に渡る支援を続けている。自分、自国中心主義が強まる中で小さな手であるがこの手を動かしていきたい。「わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。」

こういう自己中心に生きる時代だからこそイエスさまの言葉を自分の言葉として、生きたいものであることを再確認させられたニュースだった。

園長・瞑想？迷走記

「多文化保育と幼児の参画権の保障 2008年版 萩原元昭著」の中で、「(8) 幼児の参画能力の育成を阻む過度の安全性」について実例をあげて書いている。



「プレイパークの『自分の責任で自由に遊ぶ』というモットー、もし幼児が自分の不注意で、誤って事故にあったり、けがをした場合は、幼児自身の責任という考え方は、日本の幼稚園や保育園の保育者にはなぜ支持されていくのだろうか。幼児が自分の不注意で怪我をしたとしても、先生の責任を問う親が多きことも、保育者が過度に安全性に配慮する一因になっているのかもしれない。幼児が自らの意思で自由に、責任をもって生活環境に参画する力を育成するには、「幼児の安全のためにお子さんから目を離さないで下さい」という幼児の行動を絶えず監視し、注意するという過保護、過干渉な親や保育者の言動や意識を変える必要がある。」

「幼児が自らの意思で自由に、責任をもって生活環境に参画する力を育成する」、具体的に日々の中で取り組んでいこう。

毎日の糧

聖書：万軍の主はわたしたちと共に、

ヤコブの神はわたしたちの方。 詩編46：12



ルターの言葉から

愛する神のもとで支えられていることをわたしは確信
立している。（卓上語録より）

信頼

私たちルーテル教会にとって馴染み深い詩編46編である。ルターのコラール「神はわがやぐら（教団讃美歌267）」として讃美歌は、知られている。宗教改革の歌として宗教改革記念日、その他の記念日で歌われる。

メロディー、曲はメンデルスゾーン交響曲第5番・宗教改革などに使われている。ルターのコラールが示すように神への信頼の詩編である。

「その主題は神の都エルサレムではない。信頼を支える根拠は《神います》という生ける神の臨在である。それは心情的興奮の事柄ではない。（「詩編研究」 左近淑 新教出版）」

結びは、さらに神への信頼について、詠う。「歴史的現実的世界の混乱の最終統治者として、そのみ言葉の啓示によって明示される。神の現臨とはこうした類のものである。そしてそれがわれわれの信頼と信仰の基礎的現実である。」「『「万軍の主はわたしたちと共にいます。」こそ、信頼と信仰の基礎であると信頼の詩は結ぶ。そして、そこから新たな日常が、神に《信頼する》日常の歩みが、はじまるのである。そうした体験が本詩の11節～13節の行間に埋め込まれている。それがまた、律法の定めをこえた巡礼の意味でもあった。（「詩編研究」 左近淑 新教出版）」私たちの人生の巡礼の旅は主への信頼から始まり、終わるのだとこの頃、実感するようになった。神が感じられるようになる。

祈り：主よ、人生にあなたへの信頼を確かなものとしてください。

甘本通信

かつてあったことは、これからもあり、かつて起こったことは、これからも起こる。太陽の下、新しいものは何ひとつない。コヘレト 1 : 9



教会の暦を閉じようとしている今日である。必ず私たちは平等に死という終わりの日がある。「かつてあったことは、これからもあり、かつて起こったことは、これからも起こる。太陽の下、新しいものは何ひとつない。」ということを死という終わりが近づいている今、私は実感する。

しかし、終わりを虚無的に捉えるべきではないと思う。終わりがあるということは、神の時への恵みのみわざであるとますます感じるようになった。この苦しみは、行き詰まりがずっと続くなら苦しみしかないが、必ず終わりがあるということは希望ではないだろうか。ここから、今の自分の置かれているところをみると、「かつてあったことは、これからもあり、かつて起こったことは、これからも起こる。太陽の下、新しいものは何ひとつない。」、私だけではないということに気づく。私に起きていることを本を読んだり、人からの体験を聞くととき誰も起きていることである。

引退して、偶然であるが九州に帰ってきて、幼稚園の再建ということになり、教会の委嘱であるが、現役時代と変わらない責任が肩に重くのっているが、老いからくる体の変調がある。しんどい時、これは私だけが体験したことではない、終わりがあると思うと一歩踏み出すことが出来る。一歩踏み出すと力んでことにあたるのではなく、喜んでことにあたる事ができるようなっている。すべてに時があるんですね。

(甘本日記)土) 信徒さんが家に寄ってくださり、バザーの品物と私たちを運んでくださる。日) バザーの準備。出来たことは嬉しい。月) 幼稚園、子どもたちと礼拝から始まり、最後までおられる楽しみをいただく。火) 牧師、二日市教会での仕事で留守だが、教会のコンサートで午後から来て下さる。花壇の花を購入、今のところ 15,000 円出費。水) 明日、松崎保育園、羽村幼稚園に行くので花を植えようとするが、保護者交流会、職員会議、保護者お父さん会などあり予定通りにならない。木) 午前中は松崎保育園で幼児祝福式、午後から羽村に。金) 羽村で管理者会議。

おまけ・牧師のぐち（続日記）牧師だって神さまの前でぐちります。
ぐちらない聖人（牧師）もいます。

土）一週間を走った疲れもあり、無理することなくゆっくりと午前中をだらだらと過ごす。午後から幼稚園、幼児祝福式の準備をする。入院中のお父さんを訪問していた信徒さんに電話をして、バザーの品物を運んでいただくためにわが家に寄ってくださるようお願いする快く yes の返事、ついでに私たちを運んでくださる。疲れている体には妙薬である。日）幼児祝福式の準備した礼拝だったが、誰も来ず。こんなときもあると数十年つづけている。継続しかない。午後から、教会の真向いの家が売り出しに出るという。見に行く。正直、欲しい家である。何か人生の決断を迫られているような気がする。午後からバザーの準備。小さな教会で出来たことは嬉しい。月）幼稚園、子どもたちと礼拝から始まり、預かり保育の園児を最後まで送る。長時間、ここにおれたことに感謝である。多くの楽しいというエネルギーをいただく。火）久留米の牧師さんは、今日は、二日市教会での仕事で留守だが、教会のコンサートで午後から来て下さる。牧師がいるということだけ、安心できる。まあ、確実なお守りという出来事。花の苗の仕入れ日のホームセンターに花壇の花を購入、今のところ 15,000 円出費。聖歌の「みなささぐ」までに信仰を向けたい。水）明日、松崎保育園、羽村幼稚園に行くので、花の苗を全てを植えようとするが、午後から保護者交流会、職員会議、夜には保護者のお父さん会などあり予定通りにならない。保護者交流会には、年中さんが作ったスイートポテトを食べ、クリスマスの時に作る家内のフルーツケーキの作りを見学し、出来上がったケーキをもって帰っていた。お父さん会はクリスマス会の祝会の打ち合わせ。私の主治医が二人来て下さる。「牧師先生にも劇を手伝っていただきます。よろしくお願いします」、「なんでも手伝いますよ」と牧師先生は応えてくださる。なんと幸せ。帰り飲み屋を除くと主治医が、何もなければ入りたい気分だが素通り。木）午前中は松崎保育園で幼児祝福式、昼食をいただく。子どもたち一人一人が元気に大きく育って欲しいと願う。夕刻、東京へ。友人が風邪で、宿泊出来ない。まずは寝込んでいる友人を見舞う。金）羽村で、あさから管理者会議。帰り中央線で事故、飛行機に乗れるかどうかという事態になる。どう（**帰りの羽田空港⇒**）にか間に合う。明日は甘木教会で、バザーであればならない。アクシデントを予想したスケジュール作りをと反省。

